

キャリアヒストリー：わたしの場合 No.2 (卒後20年目。大学の医学教育センター教授として医学教育の実践・研究・海外発信に取り組んでいます)

I わたしの医学教育者としての特徴は？

- * 現場と大学をつなぐ医学教育実践者として自他の大学や諸機関に様々な形で貢献し、国内学会に加え国際学会にも積極的に発信する医学教育研究者。
- * 「振り返り」や「対話」を基盤とした学習者の協働的な学びや学習の促進に関心を持ち、多職種連携教育や家庭医療/総合診療の教育などに尽力。

II わたしが、医学教育者として（／になるために）歩んできたキャリアとライフを、一言で言うと…

- * パイロットを諦め看護体験により医師を志し、家庭医・総合診療医のキャリアの中で医学教育を学び、博士課程を経て、大学教員としての役割を担う。
- * 3人の子とももつライフと調和できる大学のキャリアを選択し、大学を足場に、組織・地域・多職種・海外へと活動・発信の場を着実に広げている。

- ① (医学部入学以前) 期 …地方の片田舎で育ち、家族や親せきには医療関係者がいない。パイロットの夢を視力低下ゆえにあきらめ、高校2年頃に医師を志した。病院での1日看護体験で医療に関心を持ったが、男兄弟の中で育ったため、女性に囲まれる看護師と異なり、居心地がよさそうで、手に職を持つために進学を勧める両親に説明しやすい医学部を目指す。具体的な医師像をもたずにA医科大学医学部に入学し、それなりに遊びながら、卒業した。
- ② (初期研修医) 期 …2004年3月にA医科大学医学部を卒業後、いずれ故郷の医療に貢献したいという思いをもちながらも、一度は故郷を出たいと思い、「臨床研修必修化元年」の同年4月にB病院の初期研修医として入職した。人間全体に興味があったため、家庭医・総合診療医に専攻を決めた。
- ③ (後期研修医) 期 …B病院の家庭医療後期研修プログラムに入り、2009年学会認定家庭医療専門医を取得した。屋根瓦の真ん中で初期研修医の指導にも関わり、後期研修医制度のプログラム構築にも携わった。2009年～1年間、Home and Away Nine Days Faculty Development Fellowship に参加した。
- ④ (病棟医長兼医学教育フェロシップ) 期 …B病院の病棟医長と併行して、医学教育フェロシップで医学教育のポートフォリオを作成した。
- ⑤ (博士課程) 期 …2011年4月にC大学医学教育国際研究センター博士課程に入学し、並行してがんプロフェッショナル緩和ケアコースにも所属した。またGlobal Leadership Program (2011.4～2012.3) のInternshipで2011.11～1ヶ月英国に短期滞在し、Interprofessional education を学ぶ機会を得る。
- ⑥ (D大学スタッフ) 期 …2015年4月、D大学附属病院・病院講師として臨床・教育(医学生・研修医・大学院生等)・研究に携わる。2018年に医学教育企画評価室に異動し、総合診療、大学の医学教育カリキュラムや評価を担当。2019年に地域医療の講座の准教授となり、地域行政と大学教育の連携に奔走した。
- ⑦ (E大学スタッフ) 期 …2020年4月よりE大学医学教育統轄センターに異動し、入試業務、カリキュラム開発と評価、総合診療に関連する教育業務に関わり、2021年4月より卒後臨床研修センターのセンター員として研修医教育に関わり、2023年4月から教授および総合診療教育センター長を兼任している。

Ⅲ 医学教育者としての、これまでのキャリアとライフの歩み

時期区分	ライフイベント等	特に取り組んだこと (課題・重点等)	達成・実現できたこと (業績・効果等)	困難さや苦勞したこと (問題・悩み等)	原動力や助けられたこと (動機・契機・環境等)
① 大学入学までの時期	地方の片田舎で育つ 家庭・総合診療医専攻	・パイロットの夢をあきらめて、 医師を志す(高2)。	・一日看護体験や両親の期待から、 医学部を受けて合格。	・学生時代は具体的な医師 像をもたなかった。	・学部でそれなりに遊ぶ。 ・臨床研修必修化元年
② 初期研修医 期 2004, 4~	社会人としての自覚と責任	・同期と毎日「振り返り」 —「自分自身が学ぶ意味」 —学びを言語化する習慣	・仲間・先輩との対話でメタ認知の 視点が得られ、感情が浄化された→ 医師としての知識・技術・態度を育 んだことを実感	・臨床業務が忙しいため実 践がメインで、理論的枠組 の獲得が困難(自己学習の 時間とメンターの探索)	・「振り返り」との出会い・身体化 ・主体的で楽しい学び ・学習(者)への注目と教育観の変化 どう教えるか⇒どうサポートするか?
③後期研修医 期 2006, 4~	2008年結婚、第1子誕生	・初期研修医の指導、チーフレジ デントとして後期研修医の指導、 病棟多職種スタッフマネジメント ・一対一の指導、家庭医療の指導	・同年代の医師たちとの協働学習で 医学教育の基本概念等を学び、各領 域WSやチーフレジデントマニュアル を作成。	・上に同じ ・主体的学びを促進するシ ステムの必要性	・「振り返り」の必要性・適用の熟達 ・モデリング ・正統的周辺参加できる組織文化が学び の促進要因に。
④病棟医長兼医学教育 フェロシップ期 2010, 4~	2011年3月第2子誕生	・健康教室プログラム開発、研修 医メンタリングやOSCE開発、家庭 医療カリキュラム構築や緩和ケア チーム運営。	・経験を Teachers Role に落とし込 み、医学教育ポートフォリオ作成。	・上に同じ ・大学と現場の往還ができ る医学教育研究者の必要性	・視野の拡大(多職種・組織・地域) ・医学教育フェロシップでのポートフ ォリオ作成が、医学教育者のアイデンテ ィティに大きく影響。
⑤博士課程期 2011, 4~	病院勤務から大学院在籍 にシフト 2013年に家を購入	・学部生教育にも関与 ・IPE 国際学会等に参加し日本の文 脈での IPE のカリキュラム構築を 必須と考え、国際学会でも活躍。	・医療福祉等関連諸学会と多職種連 携コンピーテンシー共同開発。 ・関係学会での地域医療や多職種連 携関連委員会で活躍	・上に同じ ・シームレスなつながりに 向け実践と研究を架橋する 実践研究者の必要性	・大学というアカデミックな場で世界に 発信し、往復・橋渡し・翻訳できる研究 者として実践したい。
⑥D 大学スタッフ期 2015, 4~	2014年第3子誕生 病院でなく大学キャリア を選択	・総合診療科の教育、医学教育企 画評価室。地域の病院を核とした 学生教育や医学生の評価に注力。	・大学へのコミットメントと国際的 な視点との両立 ・制度的構築と組織マネジメント		・卒業生やプログラムディレクターを務 めた医学教育フェロシップ受講者の動 向で、教育のインパクトを実感。
⑦E 大学スタッフ期 2020, 4~		・医学教育統括センターの業務、 初期研修医教育、大学総合診療専 攻医プログラム責任者 ・地域診断実習の教材開発等 ・生涯学習としての教育学や医学 教育のエビデンスの俯瞰・応用	・医学生 IPE プログラム評価研究 Medical Teacher 掲載(懸田賞) ・学会の諸委員会、共用試験実施評 価機構(CATO)、R.4モデル・コア・ カリキュラム改訂プロジェクトリー ダー、論文化チームリーダー	・医学教育者として研究を 進める能力にまだ課題 ・医療現場と大学教育の乖 離が進むことへの懸念 ・情報技術や環境問題への 医学教育の転用	・現場に役立つ医学教育研究 ・次世代につながる教育文化の醸成 ・医学教育に関わるリーダーの一人とし ての社会的責任と国際的発信 ・医療従事者・医学教育実践者・医学教 育研究者としての経験と発信

IV 抱負

2024年現在、医学教育実践者として自他の大学教育や学会活動、医学教育研究者としてリアリストアプローチ（世界でも稀有なプログラム評価研究方法）や多職種連携の講演などを行っている。今後、医学教育実践者兼研究者として、社会の状況に適應できる医学教育者として Collective competence が醸成できるチームを構築・刷新し、環境・社会・ガバナンスを意識した未来を見据え、日本での家庭医療/総合診療の価値の浸透だけでなく、アジアを中心とした海外との協働プロジェクトや多職種連携教育の国際比較研究を通して、医学教育の国際的な変革・刷新に携わりたい。

V 次世代や悩めるあなたへのメッセージ

医学教育に携わることで、人々の成長に貢献できるのは非常に魅力的なことです。現在、皆さんの前にいる学生、研修医、専攻医、大学院生、さらには多職種のメンバーの成長は一見すると分かりにくいかもしれませんが、自分のことが分からなくなるときもあるかもしれません。しかし、諦めたり、投げ出さずに、学習者のニーズに耳を傾けてみてください。彼らの声に耳を傾けることが、学習者を支援する第一歩になり、ひいては患者さんやその家族にポジティブな影響を与え、あなたの行動が周りの人々を勇気づけ、時に数年後に静かながらも大きな影響を与えていたことを感じる場合があります。

医学教育では、目に見える成果だけでなく、目に見えない価値も見出してください。教育のメカニズムは複雑で、無数に存在し、その関係性はクモの巣のように複雑に絡み合っています。時にはそれに足を取られることもあるかもしれませんが、医学教育研究を通じてその一部を解明し、現場での教育に活かし、教育の背後にあるメカニズムを実感することができれば、あなた自身や周囲の教育に対する考え方、あるいは制度やシステムも変わるかもしれません。この分野への関心を持つ人が一人でも増え、共に未来を創造する仲間となり、小さな影響が大きな潮流となることを心から願っています。